

南九州の森林・緑地における都市住民のレクリエーション行動に関する研究（Ⅲ）

—日帰りレクリエーション集団の森林・緑地の利用状態（1）—

宮崎大学農学部 中 島 能 道
九州大学農学部 塩 谷 勉

(1) 研究目的

この研究は、南九州の森林・緑地あるいは、その内部ないし周辺に所在する湖沼、渓谷をめざしてやってくる日帰りレクリエーション集団の実態を調査し、今後のレクリエーション適地としての森林の施業ならびに森林・緑地内の施設整備方策に関する基礎資料を得ることを目的として、昭和46年5月より実施しているものである。

この報告では、日帰りリクリエーション集団の性格づけを試み、次いで既存の調査資料から日帰りリクリエーションに森林が利用される状態を概観する。

(2) 日帰りレクリエーションの性格づけ

日帰りリクリエーションは、「日帰り」という但し書きどおり、宿泊旅行をともなうリクリエーションとの対比において定義されるものであり、相対的に短距離かつ短時間の旅行を付随させているものである。このように考えると、「人が再び自らの日常的な生活空間に立ちもどってくる予定で、平常の生活圏を離れ、1日の余暇を利用し、他人から強制されることない自由で快的な活動を展開することによって、明日からの恒常的な生活行動にともなうフラストレーションに適応しようとする一連の行動のことを、日帰りリクリエーションという」と定義することができるであろう。

しかし、レクリエーション欲求の側面から日帰りレクリエーションを考えると、どうであろうか。今井ら¹⁴⁾はレクリエーション欲求を優越欲求型と、集団への同化欲求型の二つの典型的なタイプに分けて、図・1

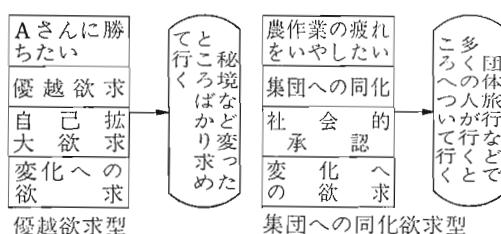


図1— 欲求のヒラルキー

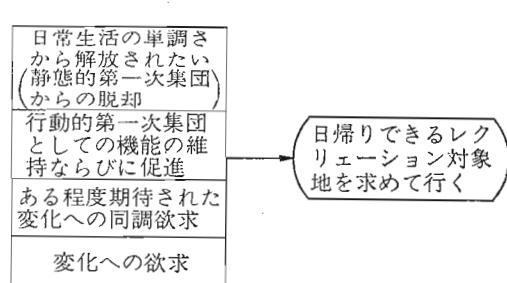


図-2 日帰りレクリエーション欲求の構造

考える。その根本には、レクリエーション集団は本質的に行動第一次集団である、という考え方がある。

(3) 森林・緑地が日帰りレクリエーションに利用されている状況

わが国の全人口のうち78%以上が日帰りレクリエーションの経験者であることが、昭和45年3月から1カ年にわたって行なわれた内閣総理大臣官房審議室による調査結果から明らかになった。これらの人々のうち森林・緑地を含む自然環境を選択している人々が20%でもっとも多く、海浜16.5%，社寺参詣・お祭り見物14.9%，ドライブ13.4%，遊園地・動物園11.7%と続いている。以下、若干その内容に立ち入って、ながめて見る。

- 1) 市部・郡部別：森林・緑地を選択した人々は市部で77.5%，郡部で22.5%であった。
 - 2) 月別：森林・緑地に出かける頻度を月別に概観すると、4・5・8・10・11の各月にかなり高い比率を示している。他の選択個所への比率と対照的である。
 - 3) 距離別：森林・緑地の自然環境は10～55kmの距離にある場所が多く選択されている。

4) 同行者：同行者が家族および友人など、気心の知れた人々である場合が、日帰りレクリューション全般について圧倒的に高い比率を示している。同行者数は、森林・緑地が4～5名がもっとも高い比率を示している。

(4) 結び

日帰りレクリューション集団は行動的一次集団の典

型的な諸特性を具えていることが、うかがわれる。以後の研究では図・2から導かれる諸仮説にもとづき、研究を進める方針である。

注) 1), 2) 今井省吾他, 観光の心理分析, 日本交通公社, 昭和44年3月

3) 塩谷勉, 中島能道, 大都市住民と森林, 熊本営林局, 昭和47年10月